西大寺旧境内の調査（平城第597次）

西大寺は天平神護元年（765年）に称徳天皇によって創建された寺院です。奈良時代、西大寺は平城京右京一条三・四坊にまたがって広大な面積を占めており、東大寺にならび称される規模を誇っていました。この西大寺旧境内に建設される共同住宅の工事に先立ち発掘調査をおこないました。調査面積は155.55㎡で、2018年２月20日に調査を開始し、３月30日に終了しました。

調査地は平城京右京一条三坊七坪にあたり、西三坊坊間路東側溝の計画ラインが調査区内に入ることが想定されました。しかしながら、奈良時代の遺物をふくむ溝は調査区内では検出されず、西三坊坊間路東側溝は条坊計画のラインよりもずれることがわかりました。また、中世の羽釜等の土器や瓦を多量にふくむ南北溝一条、中世の土師皿や箸等をふくむＬ字溝を一条検出しました。遺構からは中世の土器や瓦片が多量に出土しており、当該地が中世において活発に利用されていたことを読み取ることができます。

今回の調査で注目すべき成果として、巨大な掘立柱の柱穴を１基検出しました。柱穴の規模は東西幅約2.2m、南北幅約2.6m、深さは検出面より約2.1mです。柱穴の中からは奈良時代の土器や瓦が出土しています。この巨大な柱穴掘方内の北西隅に、直径約70㎝、残存長約150㎝のヒノキの柱根が遺存していました。柱穴の西壁と柱根の隙間は0.1mほどで、意図的に西壁に寄せて立てられたことがうかがえます。柱根の底面は斧によって平らに加工されていました。また、この巨大な柱を直立させるために、柱の下に板材を楔のように入れて調整したようです。さらに、柱根の周囲には井桁を組むように十数点の木材を配置し、根固めをしていました。根固めの木材には枘穴が残っているものもあり、多くは建築部材を転用したものと考えられます。

同規模の柱穴は周囲にはなく、建物の柱の可能性は低いと考えられます。さらに、巨大柱穴を検出した場所は奈良時代当初の中心伽藍である薬師金堂・弥勒金堂を取り囲む回廊の外側、東南隅に位置します。独立した柱穴である点、中心伽藍の東南隅に位置する点を考えあわせると、寺院を荘厳するために旗をかける「幢幡（どうばん）」の可能性が考えられます。「幢」の記述は、宝亀11年（780年）に作成された『西大寺資財流記帳』にもあります。今回検出した柱根が『西大寺資財流記帳』に記されている「幢」にあたるかどうかは、これからさらなる検討が必要になります。古代・中世の西大寺の様相をあきらかにすべく、これからも調査を進めていきたいと思います。

（都城発掘調査部　浦 蓉子）

調査区全景（南西から）

柱穴にのこる柱根（北東から）